

新春 座談会

伊勢型紙 × 鈴鹿墨

～過去、現在、未来 伝統の先にあるもの～



鈴鹿市が誇る伝統的工芸品「伊勢型紙」「鈴鹿墨」は、共に鈴鹿の風土の中で誕生し、長い歴史の中で地域に根差し、多くの人々に親しまれてきました。現在、ライフスタイルの変わりつつある中、伝統産業の世界においても新たな価値が生み出されています。

今回の新春特集では、「伊勢型紙」と「鈴鹿墨」の世界で活躍する皆さんをお迎えし、先人から伝えられてきた技術を生かしつつも、未来を見据えた新しい取り組みやこれからの意気込みなどについて対談していただきました。

対談場所:鈴鹿市伝統産業会館

市長 明けましておめでとうございます。今年はいせ型紙と鈴鹿墨を新春号で特集いたします。共に長い歴史を刻んできた伝統的工芸品ですが、皆さんは新しい取り組みや未来に向けたチャレンジをしながら、次の時代への継承を図っていただいていますね。本日は、「変革」や「挑戦」をキーワードにお話を進めていきたいと思えます。まず初めに、皆さんはどのように伊勢型紙や鈴鹿墨と関わりを持たれたのでしょうか。

那須 2010年に伊勢型紙の修行をするために岐阜市から鈴鹿に引っ越してきました。修行も12年目になります。

市長 以前から伊勢型紙には関心があったのですか。

那須 最初は伊勢型紙の存在は知りませんでしたが、手仕事で生涯をかけて打ち込めるものは何かを考えたときに伝統工芸が頭に浮かび、いろいろ調べるうちに伊勢型紙に出会いました。「絶対にこれがいい」と思い、遊びや趣味ではなく、職業にするつもりで鈴鹿に来ました。



なすけいこ
那須 恵子さん
伊勢型紙職人



ばんたい こうか
万代 香華さん
書家

市長 万代さんはいかがですか。

万代 書道塾を開いていますが、鈴鹿墨を製造する進誠堂のスタッフとしても、色見本を書いたりしています。

市長 小林さんは伊勢型紙との関わりは長いですよね。

小林 45年になります。父親が伊勢型紙の販売業でしたので、もともとは職人になるつもりはなかったのですが、将来職人がいなくなるといけないと思い、一応技術も身に付けておこうと5年ほど修行に出て、彫りを勉強したのがスタートです。

市長 現在鈴鹿では伊勢型紙の職人は何人ぐらいいるのですか。

小林 30人いないぐらいではないでしょうか。

市長 鈴鹿墨はいかがですか。

万代 進誠堂1軒だけです。鈴鹿墨をすごく好んで使われる書家もたくさんいますので、絶やすわけにはいきません。

市長 ありがとうございます。伝統産業は継承していかなければいけないと思いますが、若年層の方が関わる機会をつくるために、特に取り組んでいることがあればご紹介ください。

小林 後継者育成は国の補助金なども活用しながら進めています。1人は5年間の修行を終えました。現在、2人が修行を行っているところです。その時代のニーズに合わせていかないと、生き残っていけないと思います。

市長 そうですね。最近、伊勢型紙は障子やライトなど、イン

テリアとしても生かされていますし、鈴鹿墨もお菓子で使われたりしていますよね。

万代 進誠堂では、衣食住の関わりの中で墨を広げていきたい思いがあります。最近では、建築材料やお菓子などで活用されています。こうしたことが契機となり、墨に興味を持っていただけるとうれしいですね。

市長 伝統産業は「特別なもの」という声もよく聞きます。そうではなく、身近な日常に根づくものとして認識していただくには、どのように取り組んでいけばよいとお考えですか。

那須 私は、伝統産業は特別なものでよいと思っています。特別なものではありませんが身近に使えるもの、家で使えるからうれしいといったように、日々の暮らしの中で、触れ合う機会が増えるようにする必要がありますと考えています。

小林 イベントなどでワークショップを行うと、「彫り」よりも「染め」の体験のほうが人気があります。ちょっとしたポーチや年賀状などにも活用できるということをもっと知っていただくことが大切です。

那須 型染は手作りで同じものがいくつもできるという良さがありますね。

市長 子どもたちは書道で小さいときから墨に親しむ機会が多いと思いますが、いかがですか。

万代 墨は作ってもらう体験は難しいので、出来上がったものをいかに使ってもらうかが課題です。小学校や書道塾では、墨汁ではなく墨を磨る経験を子どもたちにはたくさんしてほしいです。子どもたちが墨に触れ合う時間を増やすことで、「鈴鹿市は伝統産業を大事にしている市なんだよ」というPRにつながると思います。



小林 教育と関連を持つことが大切です。墨を磨っている間に気持ちを落ち着かせる、集中力が増すといった効果がありますよね。

市長 伝統産業を継承していくということは、子どもたちの教育の中で習慣づけるなど、当たり前のように普段から触れることが大切ですね。

万代 子どもたちは、墨はボトルから出てくるのが普通だと思っていますので。

市長 学校の授業の中で、いかに取り込んでいくのが課題ですね。

万代 本当にそう思います。

市長 那須さんはまったく別の世界から伊勢型紙の世界に入られました。今後どのようなことに挑戦したいと考えられていますか。変えていきたい、伊勢型紙と向き合っていきたいことなど、何かありましたら教えてください。

那須 自分と同世代やさらに若い世代の方に、伊勢型紙は「格好いい、おしゃれ、魅力的なもの」とであると伝わるようにしたいです。そのためには、ふさわしい作品やサービスを提供したいですし、それに見合ったセンスと技術を磨きたいと思います。

市長 他の伝統工芸に携わる職人の方々とコラボレーションをしたりして、活躍の場を広げられていますよね。

那須 ものを作るといふ基本は大事ですが、それをどう伝えていくのかに課題があると感じています。ものはいいのにしっかりと

伝わっていない現状があって、そもそも伊勢型紙が染め道具であるという基本を、自分たちがどれだけ発信できているのだろうと不安に思うこともあります。基本をしっかり発信することで、他の伝統工芸の職人たちとのつながりもできて、新しいものが生まれるということにつながっていくのではないかと期待しています。

市長 万代さんは書家としてご活躍されていますが、鈴鹿墨を今後どのように展開していきたいといった夢をお持ちですか。

万代 墨は使ってもらってその良さが分かるというのが一番ですので、必ずしも字を書くということだけではなく、お菓子や建築材料でもいいので、書家だけではなく、いろいろな方にまずは広く知っていただき、興味を持ってもらい、そこから実際に使っていただければいいと思います。

市長 那須さんや万代さんのような若い世代の方が頑張ってくださいと、さらに違った展開をしていくことができるかと思っています。伝統産業が活性化すれば地域も活性化すると思いますので、行政としてももっとチャレンジしていかなければなりませんよね。小林さんいかがですか。

小林 伝統的工芸品の指定要件として、「主として日常生活の用に供されるものであること。」と規定があります。日常的に使っていただけるものとして、どのように展開していくのか、行政も含めて皆さんの知恵をお借りしたいですね。

市長 伊勢型紙も鈴鹿墨も長い歴史の中で形を残しながらも、時代に即した変化をしながら、現在に至るまで受け継いでいただいておりますので、貴重な地域資源であると念頭に置きながら、取り組んでいきます。

小林 ありがとうございます。

市長 さて、今回の対談をきっかけに、一緒に作品を作るというのはいかがでしょうか。

那須 そうですね。墨は染料としても使えますので、鈴鹿墨と伊勢型紙を使って着物を仕立てた方もいますし、色紙や台紙に型紙で模様をつけたいという書家の方もいます。

両方の長所を生かし合いながら、子どもたちが楽しめるようなものができれば、鈴鹿墨と伊勢型紙を知っていただくきっかけになるのかなと、ふと思いました。

市長 ありがとうございます。それでは最後となりますが、今年一年の抱負をお伺いできればと思います。

那須 今年こそ、もっとたくさん染め型紙を彫りたいですね。そして「上手くなった」と実感したいです。

小林 現在、一般の方にも分かりやすく理解していただけるよう、型紙のテキストを作成していますので、何とか完成させたいですね。それをいずれ「型紙検定」につなげていければと思っています。

万代 古典の臨書をしたり、作品を書いたり、とにかく書く時間を増やしたいですね。

市長 私たちも皆さんが活動しやすい環境づくりにしっかりと取り組んでいきたいと考えております。今後のますますのご活躍を期待しております。本日はありがとうございました。

市長 末松 則子



鈴鹿市伝統産業会館

伊勢型紙、鈴鹿墨の伝統工芸を紹介し、優れた技術を後世に伝えることを目的に昭和58年に開館しました。伊勢型紙や鈴鹿墨の作品・製造道具などの実物やパネルの展示のほか、定期的にその製造工程の一部を実演しています。

伊勢型紙

伊勢型紙(形紙)は、着物やゆかたなどの生地、柄や文様を染めるための型紙として用いるものです。美濃和紙を柿渋で貼り合わせた「型地紙」に、彫刻刀で図柄を丹念に彫り抜いて仕上げます。型紙の始まりは千有余年前ともいわれ、少なくとも室町時代末期には、寺家に型紙が存在したと考えられています。昭和58年には通商産業大臣の「伝統的工芸用具」の指定を受け、近年では美術型紙や建具、インテリアなど魅力ある商品づくりに取り組んでいます。



鈴鹿墨

鈴鹿墨は、発色がよく上品で深みがあると評されています。鈴鹿では平安時代(800年頃)に初めて墨が作られたとも言われており、この地が奈良と並んで墨の二大産地となったのは、原材料となる肥松がとれたことや水が弱アルカリ性の水質であるといった諸条件に恵まれていたことがあります。昭和55年には通商産業大臣の「伝統的工芸品」の指定を受け、近年では色彩墨や建築塗料、輪島塗りのコラボレーションなど新たな商品づくりに取り組んでいます。



今回の特集に関するご意見・ご感想は地域資源活用課

☎ 382-9016 📠 382-0304 ✉ chiikishigenkatsuyo@city.suzuka.lg.jp